

あを

12

2011





恩田秋夫の 一茶俳句切手

餅つきをせがむ子どもをはりあひに
餅つきをせがむ子もなし然りながら
一枚の餅の明りに寝たりけり
小筵や餅を定木に餅をきる
鶏が餅踏んつけて通りけり

一茶

この切手で恩田秋夫先生の切手シートのご紹介も終わる。割烹着を着て餅を焼く母親像は私の世代には皆自分の母親のごとく思ふことであらう。やさしく切ない作品である。今回の切手には父親らしい人は出てこなかった。祖父は明治薬科大学の創立者であられる。生前先生は自作を掛軸に作り置き亡くなった時配る計画を洩らされた。私は眼前のお元氣な先生を見て冗談だろうと話をそらしたが、奥様の「思い出すこと」といふ文を読んで真剣に死後のことを考へてゐたのだと知った。



あそ

十二月

細 縞 佐藤喜孝

八月を蹴きおほせたる盆のくぼ

石炭紀のはやさで走るゴキブリは

浮世繪のをみなをのこもをなもみを

冬瓜を生みおとしたるおばばかな

細縞を着てわたりゆく秋の風

猫のほぞさがしてもみむ後の月

ここまでは三泊四日天の川



第一句集の『青寫眞』から今回の『母瑠河』まで三十年の月日が経つてゐた。句集を頂きっぱなしの方に近況報告のつもりで数部作った。なので第一句集の時のやうな昂ぶりはない。勿論反響などは期待してはゐなかった。ところが『萱』誌で敬愛する小島良子さんが採り上げてくれると葉書を頂いた。驚いた。どの句だらうと『萱』を楽しみに待った。句は

入口に電柱のある冬の通夜
であつた。又驚いた。この句は亀田虎童子・小島良子ご夫妻の息子さんのお葬式でお宅にお伺した時の作品なのである。きつと神様の悪戯であらう。同時期に「骨壺を抱く二八年前のやうに」も作った。いろいろなことがあつたが『母瑠河』は高島茂さんに捧げる一書である。

飛驒古川

須賀敏子

水澄むや飛驒古川の鯉ゆらり

馬鈴薯の土も美味しく見えにけり

ゆるゆると山車の後行く秋祭

暮れてより素顔のままに秋祭

浅草寺履物持ちて菊供養

行く秋や円高又も更新す

七十億の一人で在りし九月尽



竹内弘子

冬瓜の葛煮の味に母の忌来る

誰も来ぬひと日金木犀まみれ

おふくろのふくろのやうな小六月

咳くときの母をすこしく疎んずる

拙さのきはまるときの大嚏

おほき頭を支へし小軀獺祭忌

朝寒し蜩のどれも薄目して



瓜が店に並ぶと一度は葛煮にして
食べる。だしを濃くしとろみをつけ
ても子供たちには評判が悪い。

風呂吹大根、こんにやくなど、以
前は食指が動かなかったものをよく
つくるようになった。母に似てきた。

風邪をこじらせて喘息になった母
の発作の苦しそうなことといったら
なかった。二人娘もそのこたちも、
今のところその兆候がないので、有
難いことに思っています。

夜 長 星

田 中 藤 穂

思ひ出に措くうすべにの酔芙蓉

捨てる捨てない秋風に訊いてみる

木曾路秋若者たちの大き靴

転ぶなど云ふから転ぶ紅葉山

夜長星あかんぼ宛にハガキ書く

音信を待つゆらゆらと秋の蝶

鶏頭花穴にかくれし独裁者

鰯 雲

長 崎 桂 子

鰯雲刷毛目清やかにひろがれり

鰯雲園児の列の黄の帽子

鰯雲流れは速く波立てり

十月の光と影に急く一日

暮の秋いつ来る智恵子のほんとの空

檸檬切る智恵子の故郷思ひ馳せ

新蕎麦や風を伴ふ通り雨

万太郎の一句三六五日入門シリーズ（小沢實著）を友達から戴いた。時々電話がきて一緒に今日の頁を出して俳句の話をしたりする。

久保田万太郎が日暮里の諏方神社の前に住んでいた頃、私の生家とは百米程の距離で、私が小学校へ入った頃近くで大火事があった。三月十三日の句に、蛭汁きのふ大火のありしかな」とあるのは、きっとあの火事のことには違いない。諏方神社のお祭や夜店の句もあつて、子供の頃の夏祭の賑わいや、笛太鼓の音、神楽のお囃子、見せ物の呼び込みの声などがありありと甦ってくる。

戦争で焼けた神社は再建されて今も木立に囲まれているが、万太郎家はもう無い。

各駅停車に乗って

近畿日本鉄道にはやや古い型の、スピードもゆっくりで窓は勿論上下に開放できる各駅停車の列車が、まだ一時間に一本は走っている。急行をわざと避けて、この列車に乗り車窓を見る。物凄く高い建築物はないから、家家の間は田圃か畑になっている。雑用などで其処を二十分から三十分ほどで、乗車すれば、春の水鏡に始り早苗の優しい若みどり、それが日に日に濃くなり、瑞穂の国の黄金色。収穫を終えて土と枯色と灰色の冬。やがて時を経て、芽吹からの四季の繰返しを、この鈍行列車からぼんやり眺められるのはとても楽しい一時です。心の中で「これ以上田畑が減らないで下さい」と願っております。



早崎 泰江

蜘蛛の巣の見えてゐるやう赤とんぼ

猫じゃらしいいつもの場所で招きをり

虫の音のますます間近眠れぬ夜

魯田に藁けちらして鶏あそぶ

秋風や遠き山々呼び寄せる

コスモスの中に消えゆく人の影

ブルームーンてふ淡き花色秋薔薇

ハーモニカ

堀内 一郎

霧はれて紅葉おどろく人おどろく

天才は早死らしく文化の日

秋もはや八十五才ハーモニカ

年鑑は句のしかばねや秋ともし

涙して天の川から下りてきし

これから先のこと白菜を漬けてゐる

银杏黄葉もつと眩し天皇病む



広場

俳句の静けさを取り戻したいが、
ままならぬ日々が続く。

兎に角、身体に余裕が欲しい。地域の行事もこの所目白押しで出番がつづく。先日、俳句仲間からいつか吹いたのが気に入られたらしく声が掛って、十一月始めに新宿落合で小生のハーモニカを吹く会を開いてくれる。私を励ます開花も、容易く返事はしたものの、何としても素人芸。秋冬の童謡謠心に、自在流で行くつもり。毎日吹き易いように数字譜を書き直している。最後に高野辰之作「故郷」で締めくくる。

聴いていただきたい曲・吹ける曲・吹きたい曲と、一致しないのが難しい処。思うように行かぬのは俳句と同じである。

水の秋

森 理 和

赤とんぼ 四句

城崎や池にあぶあぶ赤とんぼ

手の平で救ひ上げをり赤とんぼ

秋日和指に食ひ込む前・中肢

翅乾き高見へ一気赤とんぼ

林檎剥くいとほしきほど小さき種

鉦叩かず子のかずは平和の和

水の秋つぎつぎ回路張るあさぎ



山 莊 慶 子

咲き群れて淋しさ湛ふ曼珠沙華

凜として風の意のまゝ秋櫻

川土手の青きに交じる草紅葉

枯草を纏ひて歩く仔犬かな

行く舟を犬と見てゐる秋の夕

天高く野球少年大靴

何もかも吸ひ込んでゐる秋の空

カフェの火除けに葡萄を植えて十年になる。天麩羅用の太い菜箸ほどの幹が大蛇の様に育っている。品種は芳香のある薄緑色のナイアガラ。二度の剪定後も三十以上の房が実っていた。花の頃・梅雨入りに・夏の盛りに軽い防虫剤を撒いた。九月末頃には粒も大きく房が目立つ様になると「食べられるんですか」「ええ、十一月ですね、おいしいですよ」。十月に入ると日除けの役目から食べる楽しみへと期待が膨らんだ。矢先も矢先、薄皮を残し上部四粒ほど器用に食べる被害に遭う。日に日に増える。棚から下がる長い尾で鼠と分つた。小鼠か子鼠かは決められないが思わずかわいい！泣く泣く廃棄。味見をした三粒ほどの格別な甘さが忘れられない。来年からは袋掛けだ。

コスモス

近くにボランティアの人達によるささやかなフラワーパークがあり、コスモスが一面に芽を出し、少しずつ成長して蕾をつけはじめる頃、台風がやってきました。コスモスはすべて倒れかかってしまいました。が、傾いたまま、再び真っ直ぐ上に向って伸び続けました。

今、丈も高く伸び見事に可憐な花を咲かせています。

辺り一面コスモスの花盛りの中をピンク色の風に吹かれながら犬を散歩させているこの頃です。



吉弘恭子

飛舸のやうさくらもみぢのながれかな

飛鳥から文の届きし富士に雪

時雨るるや竜飛崎から懸想文

百日紅飛英のただなかふと見上ぐ

飛鳥から美幌へぬけて時雨かな

飛石にまぎる銀杏不土踏

豆電球飛び込んでしまふ秋の蚊



渡邊京子

鎖場にリュック下ろして鰯雲

外人に席をゆづられ秋涼し

黒雲をこはがる子供こぼれ萩

遺されてしづかにあほぐけふの月

パラソルと英語が目立つ運動会

コスモスのリズムに合せ蝶の羽

銭湯は同じ世代で秋の宵

二〇一一年もあと残すところ一ヶ月となった。三月十一日のことはまだまだ昨日のように思えてならない。ニュースに瓦礫の山を見ると、もどかしさを感じるのは私ばかりではないと思う。東京都が岩手県の宮古から瓦礫を受け入れた。三〇〇〇件の抗議が。「力のあるところが手伝わなくては、しょうがないじゃないですか。みんなもう自分のことしか考えないから。日本人がだめになった証拠のひとつだよ。放射能ががんがん出ているものをもってくるわけじゃないんだからね、測って何でもないから持ってくるんだから。東京も馬鹿じゃありませんよ。抗議については『黙れ』って言えばいい」このときばかりは、はじめて石原都知事の意見に賛成した。





赤座典子

初到来福島産の今年米

秋深し友のすすむるブライムス

信濃への旅一つには走り蕎麦

寡黙なる縁戚に古酒携へて

諍ひの夢残りをり椿の実

秋ともし椅子にピエロのオルゴール

菊日和復元三菱一号館



遠藤 実

ただ歩くことの幸せ涼新た

出来秋や卵をうまぬ鶏の鳴き

新米や使はぬ竈と釜の錆

行く秋やどどと時過ぐ老一と日

野のありて芒は揺れるほかはなし

穂芒の凭ることなき育ちかな

しはの身にまだ炎えるもの捨鶏頭

三菱一号館美術館

丸の内に復元された三菱一号館で「ロートレック展」を見てきた。

通称ロートレックは、フランス南部アルビの伯爵。トゥールーズ「ロートレック家の直系である。

大昔「赤い風車」という映画で作品を知って以来、一番好きな画家となった。怖い絵という人もいるが鋭くて優しいのである。

展覧会を巡り、生地の美術館には友達と訪れた。嵐のアルビで、半日ずつ二度通い、充分に味わう事が出来た。

三菱一号館も、アルビと同じ赤煉瓦作りで、非常に懐しかった。

それにしても、こんなに沢山ロートレックを所蔵していたとは！

これから何が出来るか、非常に楽しみである。





大日向幸江

熟柿クレーン車気持良く伸びて
菊人形地味な脇役花色で
上手より忠治出て来る文化祭
手から足口へと蟻の冬支度
白萩のしなやかに揺れこぼれ花
したり顔の人ひとひとや新酒会
見映え良き少年二人霜の朝



鎌倉喜久恵

木犀の香る明るき夜を歩く
川添の假屋にひとり夜の秋
一行を読みまた読み返し夜の秋
秋さぶや病名いまだ定まらず
薬飲む秋冷の水のど通る
冬瓜汁とろりと傘寿ののどをゆく
尻に手を添へれば温し残り茄子



テレビに「ちい散歩」という番組がある。「散歩」という言葉にひかれて見ている。私の散歩は主に鎌倉。一日一ヶ所をゆつくりと歩いている。「古都鎌倉」というけれど街は日々新しくなつて歴史を忘れたかの様だ。その真中で変らない姿をみせているのが鶴岡八幡宮。海から真直ぐ伸び参道の正面に八幡宮の社がある。その足許に右大臣実朝が殺されたという歴史を持った大銀杏が亭々と聳えて風格を添えている。その銀杏が先年の台風で根刮ぎ倒れた。悲しんだ街の人が切り取った根元の株を植替えた。その切株から今、若枝が株を覆う程勢いよくのび、大木になる様相を見せている。歴史を繋ぐ、古都を守る健気な姿に見えてくる。

秋

木村茂登子

蘇る力たしかむ良夜かな

養生訓嚙むごとく讀む秋灯下

身ほとりに佛はゐます神無月

綴れ刺すことは昔に夜の長き

その名ゆえ魅かるるものに吾亦紅

長き夜の酒と鬼平犯科帳

けふの月スカイツリーを太刀持に

秋ふかむ

篠田純子

露草のすがれてあはき星のいろ

金輪際本音は吐かぬ冬瓜汁

往きかへる高架下けふすがれ虫

目葉や秋の空より拡大す

イケメンのパパあちこちに運動会

迂闊にも3D酔ひ秋闌ける

街中をほぼ支配下に金木犀

緑内障の術後、ぶり返した残暑にすっかり体調を崩しやっと回復しつつあるこの頃である。

先日久し振りにテレビで「鬼平犯科帳」を見た。原作者の意向でオリジナル以外は許さないとのことでした。リーズにはならない傑作である。

若い頃の吉右衛門を歌舞伎の舞台上で見た時は、ベテランの脇を固める人達より際立って背ばかり高いのが印象的であった。

それから数年後テレビで山本周五郎の「ながい坂」の主人公を演じた彼に目を見張った。動きの少ない心理表現の場で実に濃い演技を見せてくれた。

それ以来のご贔屓で人間国宝になられたことは嬉しい限りである。

画面では鬼平に時々先代幸四郎の面影がダブって感無量であった。

仕事で麻布十番まで、自転車で行くことがある。

昭和通りを新橋方面に進み、浜離宮の汐入りの濠に添う。左半身のみ森林浴をしつつ昼の虫を聞く。

浜松町の東京ガスを右折して高架下に入ると、オレンジ色の照明が不気味だ。ここを潜り抜けると左に船宿が並んでいる。夏の夕方に、屋形船の客らしき、浴衣がけの若者達が見えちゃいました。

さらに進むと右手に、芝丸山古墳。都内ではめずらしい登れる前方後円墳だ。(花水木の実が赤くなってきた。)

赤羽橋から見ると、東京タワーは美しく、カメラを構えた人が私の行く手をさえぎる。六本木ヒルズが見えたら麻布十番。「さあ、仕事だ。」

たべてはる

定梶じょう

広縁がべんがら塗りで秋西日

夜学いま教室一つ消燈す

案山子ふり向きたし遠く貨車の列

危ふきに君子近よる糸瓜棚

新蕎麦や外人さんがたべてはる

秋惜しむ高いところが大好きで

人の死を悼みつ九月盡惜しむ

十一月作品より

定梶じょう

蓮の雨SPレコードの針音

佐藤喜孝

少し前まではCDではなくレコード。33⅓回転のLP、ほぼ並行して45回転の印がありました。ドーナツ盤。それ以前がSP盤の時代。もともと、LPレコードが開発されてのちSPという名称がゆきわたったのですが。いわゆる、A面だB面だといっていたのが現在はCD。そのSP盤。少し消耗してくれば当然音が掠れてきます。作者は、蓮の浮葉に降る雨音をSP盤の針音に聞きなしたのです。固有の把握でありながら普遍性をもつのが喜孝さんの俳句。

ガリ版は月の光を刻む音

喜孝

の句も、「月光」ではなく「ガリ版」に主格があつて、やっぱり独特なのです。

ちちる鳴く繕ふよりも捨てちまう

須賀敏子

こおろぎは、比較的家ぬちに来て鳴く虫。従つて、

海辺に住むものにとつて、鵜は身近な鳥。句材によくとりあげられる。上京して青年達を主とする会に参加するようになり、鵜の句を投句した。清記用紙が回りはじめて、「海にも鵜が居るのかね」「川にすむ鳥の筈だが」などという会話が耳に入る。

その時の拙句は多分へ白波が来て鵜はくぐらねばならず、あるいは白波ではなく「春濤」だったかもしれない。ともかく、海上の鵜しか知らない私には随分心外な会話。のち帰省した時先輩にその経緯をうったえたら、海鵜と川鵜があることを教わつて「どつちもどつちだな」と言われたことだった。

青年期には歳時記を読むことを、余りしなかつたにちがいない。

「繕ふよりも捨てちまう」ものは、家なかにあるものとして鑑賞できようか。もともと、鋳掛けにしるこもり傘直しにしる、街頭で繕う商い、昔はいくらもありましたが、現代は屋内外に拘わらず、なにしる修理修繕することが少なくなつたのです。友人のひとり、車のヘッドライトが点燈しなくなつたため工場に行きました。ご本人は電球を取替えればすむものと思つていたそうですが、ヘッドライト全体をとり外すと、惜しげもなく鉄屑を入れる箱の中に捨ててしまつたそうです。

まさに繕うよりも捨ててしまつたのです。システムそのものがそうなつてしまつているのです。家庭内のもので同じでしょう。そんなとき、何のこおろぎか、部屋どこかで鳴いたのです。もしかすると「冬が来るぞ肩させずそさせ」と。

因みに、結句を「捨てちまう」と口語にした処に作者の批判の目があるのかも。

已にして芋殻のこの世ならぬ軽さ 竹内弘子

この句の核、あるいは素地となっているのは「芋殻の軽さ」。素地とは、その上に手を加えて仕あげるものとなるもの、と辞書に説明してあるとおり、素地だけでは凡。そこで「已にして」と「この世ならぬ」の措辞がはたらきだす。言葉ですから、どちらにも意味があり音がある。そして今は、この二語の意味を問うべきではない、と思うのです。

勿論、「已にして」と「この世ならぬ」に死のニュアンスを感じとるのも悪くありませんが、この二語の音が調べをととのえるための字数として、是非必要であった、と読みたいのです。極端に言えば、「すでにして」と「この世ならぬ」の音だけが必要であった、と。

いわば前衛俳句的な手法なのですが、弘子さんはこういう作り方を時々なさるのです。

糸杉も金の穂麦も死の予兆 弘子

水面にあふるごとくあるのは、そのせいである、と。

枝豆や地球の上に夜が来て 堀内一郎

朝ではなく夜が来たのです。そしてその裏がわは朝だろう、と。面白い。しかしそれだけだったらことばを借りただけです。この句を俳句として認め得るのは、やはり「枝豆や」と置いたところ。経験の浅い方にはまづ真似できませんまい。

日が暮れて、さてビールでも、という場面。

コスモスの仄かに揺れて明日のこと 山莊慶子

空気の流れに敏感なものは花でしょう。猫じやらしもあれは花ですし、コスモスもむろん風に敏感な花。微かの空気の動きに答えてゆれたのです。そのとき明日のことを思った。明日のこと、といっても大事変事のたぐいではないでしょう。仄かに揺れたのですから些細なことに違いありませんが、それがきっかけで大事に至ることも、あるいは起り得る。

も、「死の予兆」をひきだすための助走として、上五中七があるのです。華麗な助走。

新涼のいがらつぽさや酢橘飴 長崎桂子

柚子の果汁と皮を練りこんだ飴をつくった方があって、私も相伴に与りました。ともかく苦くて。そのあと柚の香が鼻をとり最後に甘さがおしよせてくる。甘味はいつでも最後に感ずるものらしい。

掲句のいがらつぽさは、口に入れたときの最初の味覚なんでしょう。多分そのあと、酢橘の苦さ酸っぱさと共に、爽やかさ甘さが一どきにおしよせたかもしれません。「新涼」という肯定的な語が「いがらつぽさ」の否定的なことばを相殺して、さう鑑賞させるのです。

水瓶の萍あふる台風圏 早崎泰江

水がめに育つうきくさ。それがふえて、瓶の水面いっぱいになっているのです。折から台風。その圈内に入り、いよいよつのる風雨。うきくさがかめの

コスモスの僅かな身じろぎから、作者はそう感じとったのです。不安とも言えない不安感。

象さんの真うしろにお 春屋 吉弘恭子

どの歳時記、辞典をみても、長閑、明るさ、ものうさ、のことばが「春屋」の説明に使われています。そのとおりなのでしょう。ですが私は、掲句から不安を感じとってしまうのです。「象さん」の措辞から子供を連想し、「真うしろ」のことばから危うさを。そして結句「春屋」の字足らずがとどめをさして不安感をあおるのです。象の真うしろに子供がいる春の昼。やっぱりのどかさ、ものうさとは違う、と思うのです。もともと、恭子さんが子どもを設定していないなら、私の鑑賞はひとりよがり、ということになります。

ペディキュアの素足鎌倉喜久恵さん 篠田純子

純子さんは、時々思いも掛けぬ俳句を作ります。意表をつくといってもいい。

えのこ草やくざにお茶を誘はれる 純子
もそうでしょう。

そして、句作りの要諦要訣は、実はそこにある。
当り前のことばを当り前に並べて、省略がない穿ち
がない。そんな処に詩はないのです。で、掲句。突
然「鎌倉喜久恵さん」が登場するのです。その喜
久恵さんがしかも素足でありペディキュアをしてい
る、という。何とも意表外のこと。

今、私、おあいしたくない喜久恵さんの像を、
一所懸命作りあげつつあるところです。



あをキーワード俳句辞典(きし—きす)

汽車

汽車すぐる度に戦く金魚かな

春の宵おもちやの汽車の脱線す

枯野より貴婦人といふ汽車着きぬ

軋む

百本のキシキシ軋むチューリップ

鉄扉凍て重き軋みに耐えてゐる

高熱に関節軋む青鬼灯

春を待つ心の軋みティーカップ

きゆるきゆると空氣軋ませ初鵜

軋みけり尼寺の木戸黄落期

氣に掛かる門扉の軋み猫柳

野紺菊軋む水車の細水路

祭山車軋らせ町をねる

経堂の車軸の軋み冬は来ぬ

最上部で軋む薄暑の観覧車

櫓の軋みゆらりゆらりの花あやめ

朝の戸のかすかな軋み冬隣

関口 ゆき

東 亜 未

田中 藤穂

東 亜 未

栢森 定男

森 理和

芝宮須磨子

佐藤 喜孝

定梶じよう

須賀 敏子

森 理和

吉成美代子

森山のりこ

篠田 純子

森 理和

木村茂登子

春なのに地球は軋み又きしむ

紀州

伊豆磯石紀州青石亀鳴けり

起重機

起重機に人影動く松納

てつぺんに赤い起重機ビル凍る

夏初め起重機残るスカイツリー

気性

ゆりかもめ若くて気性あらげなる

机上

青嵐机上と違ふ現作業

贈呈の聖書机上に聖誕祭

校長先生机上に模楯長く置く

疵

冬瓜の刀疵ありむかう脛

生半に足疵いへず梅雨の雷

夕立やアガパンサスは無疵にて

遠藤 実

堀内 一郎

後藤 志づ

竹内 弘子

森 理和

竹内 弘子

松本 米子

須賀 敏子

定梶じよう

吉弘 恭子

篠田 純子

芝 尚子

毎月25日発売
定価900円(税込)

月刊俳句界

2012年1月号

特集
先人による
俳句表現革命!

特別作品 長谷川 權 黛まどか
カラクラヒア俳句界NOW 伊藤 通明

ふるさと エッセイと作品
高樹のぶ子 辻 真先 小原啄葉
齊藤美規 今瀬剛一 京武久美 他

【俳句の事件簿】
草城再評価
〇 インタビュー 室生幸太郎
〇 論考 今泉康弘
〇 連作「ミヤコホテル」
がもたらしたもの

私の一冊 五十嵐哲也
※セクション結社※ 「帆」
魅惑の俳人 高野素十
佐高信の甘口でコンニチハ!
対談 ゲスト 村山富市 元内閣総理大臣

※一部変更の可能性あります。

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

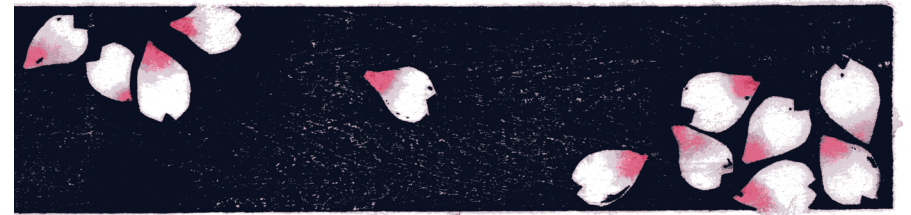
前月作品

思ひ出は二人一つに秋うらら	森 理和
唐突に別れ鴉の声はげし	山莊慶子
秋の昼天井白き検診台	吉成美代子
そはそはと月のかけゆく衣紋坂	吉弘恭子
細き上に赤逞しき彼岸花	赤座典子
空蟬のからからかと夜を走る	鎌倉喜久恵
虹消えてお伽噺の国も消え	木村茂登子
敬老日人に無限の可能性	篠田純子

喜孝抄

一人一句

笹舟はおそろしき舟月あかり	佐藤喜孝
まん丸くなりたし消燈後の檸檬	定梶じょう
台風がドレミファ橋を流しけり	須賀敏子
いちにちの煮焚のをはり遠花火	竹内弘子
鎮魂の花火の鶴は羽撃ちたる	田中藤穂
寒木瓜の灯しのいろに近寄りぬ	續木文子
思ひ出しつい目の潤む夜長かな	長崎桂子
稲撓ふ心よぎりし放射能	早崎泰江
枝豆や地球の上に夜が来て	堀内一郎



近世俳諧と漢詩文

四九

王 岩

朝風や捲荷ほどけて露香ふ

几 董

魚踊るそれに欲なき蓮見哉

この二句は高井几董の俳句で、『晋明集』第五稿に次の漢詩と共に「和句」として載せてある。

野塘 韓偓

侵曉乘涼偶独来、
不因魚躍見萍開。
捲荷忽被微風触、

曉を侵し涼に乗じて 偶独り来る
魚の躍るに因らざれども萍の開くを見る
捲荷 忽ち微風に触れられ

瀉下清香露一盃。

瀉下す 清香の露一盃

この「野塘」詩は『三体詩』に載せる七言絶句である。作者の韓偓(844～923)は晩唐の詩人。字は至堯で、至光とも称し、玉山樵人と号する。長安(陝西省西安)の出身。889年(龍紀元年)進士に及第し、翰林学士・中書舍人となった。

『晋明集』における排列から窺い知れるように、前掲の几董の「和句」は句前の「野塘」詩を生かして詠まれた作品だと分かった。

高井几董(1741～1789)は周知のように与謝蕪村の弟子で、夜半亭三世を継いだ俳人である。師蕪村と共に、『三体詩』を愛読していた。

句集をいただいてから早くも一年とはおどろいた。句集名が若々しくい。「―新しく生きること希って―」の句集名とある。名詞ではない句集名をときどき見かけるがまだまだ少ない。約四百句収めた重量のある句集の目次も句集名に添ふやうに第一章を除いて「何事も」「考える」「護られて」とつづく。読む前からわくわくする新鮮な見出しである。

銀河からこぼれ落ちたる金平糖

内容もそのやうに老いとか枯の面を見せない。この句もさうだ。銀河は四季に見ることが出来るが、七夕の縁で秋になってゐるのだらう。この句は冬の

銀河をイメージして鑑賞することにより金平糖の色彩が鮮やかになるやうだ。星の欠片のやうな金平糖を捉へた作者の瑞々しい感覚に羨望する。
このやうなメルヘンの世界に浸れる作品は句集に多く鏤められてゐる。

折紙のパンダを並べ春浅し
白砂は珊瑚の欠片裸足でゆく
回転木馬に乗って回って虹の橋
夢で降らそう落葉松の黄金の針
月朧沙漠にシャベルが忘れられ
赤まんま雀のおしゃべりする処
十五夜の兎に届けたき手紙

男は幾つになつても少年の心を持つてゐると聞いたことがあつたが、女性とても同じではないかとこれらの句を読んで思った。作者の師は中島斌雄である。

鯉裂いて取りだす遠い茜雲

斌雄

子へ買ふ焼栗夜寒は夜の女らも

抱き上げて冬日のにはふ子供かな

「爆音や乾きて剛き麦の禾 斌雄」の作者もときに優しい一面を見せる。現代仮名遣ひとともに師につながる詩心であらう。

童話には恐ろしい一面を持ち合はせてゐる。そのやうな句に、

蜘蛛の囲やふるさとの径見つからぬ
くちなわの森に帽子を置き忘れ
雷雲が来るらし童話の森に居て

人は誰でも戻りたくても戻れぬ場所がある。故郷と云ふことばはあつても、作者の故郷はそこにはない。どう行けば辿り着けるのか、作者も迷ふばかりなのであらう。

第三章（平成十四年～十七年）に入ると叙景句の佳品が目につく。

夜の底に椿が落ちるまたひとつ
椿落つばとりと赤き音のして

前句は第一章（平成六年～十年）に収められてゐる。夜の静寂に極みへ落ちる音を鋭い五感でとらへた句。「またひとつ」とじつと耳を澄ましてゐる作者がゐる。作者の心底に落ちる音でもある。後句は五感では知ることのできない「赤き音」をきいてゐる。白椿も「赤き音」で落下する。赤は命の赤である。同じ落椿ではあるが、十年程の時間が表現の深化をうながしエネルギーになってゐるのに驚く。

荒行堂の板戸は柂目梅白し

雨脚の剛さすつくと桐の花

両句、“直線”の本質を見事に表現してゐる。曲線と違ひ、直線は剛毅・清潔・潔癖・純真などの言葉を連想する。柂目と梅の白は荒行堂をさらに清々しいものにし、ありありと見ゆる丈高き雨脚に立ち向かふやうに梢に咲く桐の花。一幅の動く絵になつてゐる。

むかし先輩の俳人に夕立が地面に当たる時、跳ね返るだらう。(ミルクの王冠のやうなもの)あれを雨脚と云ふのか?ときかれた。勿論分らないが雨の足と云はればなる程と思つてしまつた。辞書には「雨の通り過ぎゆくさま」「筋のように見える降り注ぐ激しい雨」とある。跳ね返るさまはなんといふのだらうか。その話以後氣になつてゐる。両句とも作者の生きる姿勢のやうに思へる句だ。

信貴山の小鳥と朝の会話して

母の日や眼に入るものみな白し
風を呼ぶオープンカフェ桜の実
目葉をさして初冬の森の木々
朝市の地べたに値札柚子盛られ
新しき鍵で扉を開け花の雨
天平の蕨風生む薄暑かな
うたた寝をして河童忌を二日過ぎ
蟻の列転がつている鉄亜鈴
綿虫とあそぶくらしの外側で
蛇逃げし湿りなんじゃもんじゃかな
梅咲いて急につまらぬ本となる
寒月光金管楽器五重奏
心音にさざ波の立つ白木蓮
死後のことそれからのこと花万朶
深海に濡れしまなこや桜鯛
身のうちの邪鬼もO型花柘榴
落ち際の声の真つ白夏椿
六月の岬馬糞の盛り上がる
黄昏も梅雨も水底海星這う
いかずちや鍵かけておく小抽出し
対岸を人が歩いて水の秋

今日よりは〈抄〉

秋潮と肩を並べし露天風呂
遮断機をくぐり抜ければ芋名月
如月や法話のあとの白き粥
くらがりに額の花浮く墓域かな
甕の口暗し佃島青葉
がらくたの中に十能菊日和
冬日向ゴリラの前で腕を組む
川も木も木枯まとう夕べかな
荷台からはみ出し葱が右折する
縞馬も猯も横向き初景色
ひとつ落ち回りさざめく紅椿
満開の桜をくぐり目が渴く
凌霄花手足も睡眠不足かな
曲り角いくつ過ぎ来し萩こぼれ
口中に仮歯居座わり秋暑し
歩き神ついてくるなり落葉徑
土だけの鉢が転がり十二月
母思ふ七草粥をふきこぼし
被爆船静かに在りぬ弥生尽
初夏や少女の脚のよく伸びて
交番の傍からはじまる盆の市

耳元で振れば湖北の蓮の萼

『今日よりは』は前書もすくなくまことにすつきりしてゐる。信貴山ときけば私には縁起絵巻がまつ浮かが後は靄の中にある。作者には憧れの地であつたのであらう。心弾む感情がストレートに表現されてゐて惹かれる。蓮の萼を耳元で振るのも旅情ゆゑのたはむれ。旅の醍醐味を満喫されての作品である。私も道祖神の招き誘はれてしまふ。

夏子さんは私の夜の句会に時間を見付けてお出かけになつて下さる。この切つ掛けを作つてくださったのは田沼文雄・高島茂両先生である。夏子さんは文雄先生を、私は茂さんを敬慕してゐたがつまらぬ事でその関係が崩れてしまつた。しかし今、夏子さんと一緒に俳句を研鑽できるのは両先生のお陰、ありがたいの一語である。

あを創刊十周年記念句集を読む

『小面』 芝 尚子

吉弘 恭子

ぼとぼとと雀こぼるる梅雨の道

雀が高いところから地上へ何匹も一度におりてくる時がある、石の塊のように。羽根を広げていないように思えるのは私だけだろうか。

ぼとぼとこぼれるはよく見ておられる。生きているものが上からこぼるるとはなかなか言えないものだ。本当に天空から物がふってくるようだ。散歩の犬が飛びあがって驚いたのを見たことがある。

言い得て妙である。

糸のころぐさ猫のみやげに二三本
朝寝して猫の重さをたのしめり
熱帯夜寄りくる猫を持て余す
梅雨深し猫を抱きてしづごころ

尚子さんの句には猫を詠まれたものが多くある。その中でもやさしさが句にあらわれている四句を表出した。

一句目、ふと道端に揺れていた糸のころぐさが目に入った。何にでも揺れているもの、動くものに興味を抱く猫にうつてつけのものである。家でひとりで寂しく待っている「ももちゃん」にと。飛びあがってじゃれている様子が目に浮かぶようだ。

二句目、私も毎日経験しているのだが、猫といってもなかなか重いものだ。夜寝る時にはいつも寝ているところにいるのだが、何時の間にか足許の布団の上に乗っかっている。寝ている時は分からないが

起きた時は足が上手く動けない程痛い。しかし自分の

ところで寝ていた猫が愛おしく思うし、重さを確かめていろいろの思いが駆け巡る。

三句目、冬猫を抱いているとじんわりとあたたかさが伝わってきて心地よい。自分の体温も猫に伝わっていることを実感でき、忙しさの中においても心が落ち着く。しかしこれが熱帯夜となるとべつものである。想像しただけでも暑苦しい。しかし可愛い。

四句目、梅雨の頃の外出がおつくうな時、家に居ると猫は直ぐ膝にのつてくる。小さな動物が身近に居ると心が安まる。難しい人との関わりも、ふと猫に話しかけ別世界にいざなってくれる。四句とも猫に対する尚子さんの愛情がにじみ出ている。詠み手に暖かさをいだかせて下さるのも俳句の素晴らしさだと思う。わが家の野良猫も毎晩私の枕を二人？で取り合っている。

年賀状一筆欲しと思ひけり

コンピューターが普及して使いこなしてゆくと、自分で何でも印刷が出来てしまう。年賀状も然り。つい味気ないと思われる方が居られると思うが、印刷するまでデザインを考えたりして結構時間を費やす。受け取った方はそうはいかない。機械が全部やってくれたと思ってしまう。人に与える思いは自筆の方が柔らかい。この句を読んで心づかいをたいせつにしようと思った。

まづ指の野ばらの棘を抜いてから

この句は、尚子さんの思いは句の上には現れていない。しかし詠み手にとつてはいろいろ勝手に想像できて面白い。棘を抜いてからの尚子さんの行動は如何にや。ももちゃんに夜のご飯の用意かしら。そ

れとも壺にばらの花を生けるのかしら？と。きっと私が想像したことではないことのように思える。

笹藪をたたきのめして大夕立

この句の面白いところは、中七の「たたきのめして」である。俳句にこのような言の葉を使っているかと思うほど、乱暴な言い表しである。このところが私には非常に面白かった。詠み手の尚子さんからは想像も出来ない言葉である。笹藪を揺さぶっている夕立が「たたきのめして」と。使うところにぴったとはまると本当に面白い。お茶の先生をなされていらつしやる尚子さんからは想像も出来ない言い表しであった。作者を知っていて鑑賞すること、今回はとても楽しみを感じながらさせて貰った。以下の句も書きたかったが紙数も尽きた。またの機会としよう。

小面の目の奥に見る春の闇
雀の子落ちて健気な走り飛び
糸とんぼ止まりて姿見失ふ
綿虫に気をとめる人とめぬ人
大袈裟にもの言うてみる春霞
知らずしらず肩いからしてゐる残暑
白梅や引いてみやうか戀みくじ
送り火の燃えつきる時風少し
花のもといねむる人の夢は何
春泥や柂目の通る桐の下駄
夫の背にふるゝ餅花明かりかな
花むしる疾風に転ぶ紙コップ
ゆつくりと新茶のお湯をなだめけり
笑ふ合ふいびつな記憶冬隣
白梅やつぶやきほどの香のもとに
明治無く端居に大正昭和かな
青空とふらここを置く水溜り

俳書展

坪内 稔典
(俳人・佛敎大学教授)

秋野 信
(俳人・書家)

表装・佐藤 喜孝

だんごのついでに
はなはな
ふりふり
ふりふり
ふりふり



日時 2012年1月23日(月)～1月28日(土)
午前10時～午後5時
場所 佛敎大学四條センター ロビー
京都市下京区四條烏丸北東角 京都三井ビルディング4階
075-231-8004



傷

春夕焼け心の傷の疼くころ	栢森 定男	ふるさとへ絆たしかめ雪遠嶺	芝宮須磨子
傷つきし尾をひき帰る枯野みち	堀内 一郎	草取の奉仕団体絆生む	長崎 桂子
辛夷散る傷みし匂ひ土に置き	鎌倉喜久恵	犠牲	
庭の土傷だらけなり霜柱	早崎 泰江	農薬の犠牲になりし田螺かな	鈴木多枝子
聖路加の木の椅子の傷春燈	篠田 純子	軌跡	
蛇莓遠き日の傷ありありと	斉藤 静枝	春風の軌跡か虚子の筆の文字	木村茂登子
誰彼の傷知つてゐる冬木立	芝宮須磨子	季節	
傷癒えるかゆみのありし植田道	寺門 丈明	北国は雪舞ふ季節父は逝く	栢森 敏子
仏頭に涙めく傷涼新た	篠田 純子	何時死なん花の季節に生れしわれ	須賀 敏子
見ざる聞かざる云はざる人ら傷林檎	田中 藤穂	煙管	
ふと指のすすきの傷と氣づくまで	芝 尚子	灰吹にボンと煙管の音神通	東 亜未
髪洗ふ治りはじめの傷痒し	鎌倉喜久恵	囲碁将棋煙管繕ひ囲炉裏端	森 理和
薄水を踏みて傷口深くせり	後藤 志づ	毅然	
奇数		夕茜枯木毅然と立ち盡す	長崎 桂子
さくらんぼ分けて奇数と偶数と	木村茂登子	木曾	
糸ほどの絆の人よ賀状書く	芝 尚子	木曾山中滝音のする方へ折れ	田中 藤穂
		月見寺木曾三川を眼下にす	長崎 桂子

自習室

現代の俳句を読む 『萱』12月号より

小島良子

入口に電柱のある冬の通夜

佐藤 喜孝
句集「母瑠河」

昔の家では、人寄せのある時などは、襖、障子を取り払って座敷をひろげ、大人数が集まれるようになっていた。当節の家は、ドアを閉めれば外との繋がりがなくなり、人一人閉じ籠る。自宅での通夜は少なくなつた。

掲句は通夜の家の前の電柱である。普段は電柱やマンホールは、街なかにあつても気にならない。しかし、通夜という非日常の深い悲しみの中で、目の前に卒然と立つ電柱に驚く。こんな特別な時にも世の中は平然と動いている。それが当たり前なのだと承知しながらも、どこか理不尽に思われる。人を失う悲しみは、真に私だけの記憶として心に沈む。

八月の足を上げると影があり

喜孝

太陽は、今、頭上にある。物影一つない灼ける地にあつて、ふと、足を上げるとわが影が現れる。八月は人の命と生き方について改めて考えさせられる月。八月の、と詠み起こした時、此の月の重さは計り知れない。黒々としたわが足の影には、悔恨といささかの無常感を抱えながらも、現代を生きようとする強い意識がみえる。

母瑠河夜長高嶋茂算術す

喜孝

懐かしいあの頃の情景が次々と思い出される。氏が主宰される「あを」も十周年を迎える。往時茫々である。